

先日、月参りであるお宅にお伺いした時に気付かされたことがありました。

それは、お勤めが終わった後に、そこのおばあさんとお話しをしていた時のことです。そのおばあさんがこんなことを言われました。「私はもうこんな歳になって、明日のいのちがあるかもわからんでな」と。このように言われるのは、このおばあさんに限らずよく言われることですが、この方は続けて「若さん、あんたはまだ若いけど、それでも明日があるかもわからんでな。若くたってそれは一緒や」と言われたのです。

一般的に、高齢者の方から、自分の歳を悲観することに対して、「若い人はいいいね」と若いことを羨むような発言はよく耳にしますが、このおばあさんは違ったのです。「私らみたいな年寄りだけやない。あんたみたいな若い人だって一緒やでな」と。そう言われた時、私は少しドキッとしました。そして同時に蓮如上人の書かれた『白骨の御文』にある「我やさき、人やさき、きょうともしらず、あすともしらず」という言葉が思い浮かびました。ご承知のようにこの御文は、「世の無常」を見据える中で、歳に囚われることなく、一刻も早く「阿弥陀仏をたのみ、念仏もうす」身になることを期する文面で、私もお葬式の時など読む機会が多いのですが、この時ばかりは何かいつもと違うような感覚を覚えるとともに、今までよく読んで聞いているにも関わらず、どこか他人事でしかないような受け取り方をしていた自分がいたということに気付かされました。

そんな私に対しておばあさんは、私のすがたを真実の声として呼び掛けてくださったのではないかと思いました。